

副詞「どうせ」についての覚え書き

今 西 利 之

要 旨

副詞「どうせ」が用いられている文を「どうせP。」「どうせPなら、Q。」「どうせPから、Q。」の3つの構文パターンに分類し、構文パターンごとに文法的、意味的な特徴を記述した。そして、3つの構文パターンに共通する特徴として「話し手はPを成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いと認識している。」ということを指摘した。

1. はじめに

副詞と呼ばれる語群の中にはさまざまな意味・用法を持つものが混在している。これまでにさまざまな分類や整理、及び体系化が試みられているが、分類上の位置付けが定かではないものも数多くある⁽¹⁾。その原因の1つとして、ある1つの副詞の意味・用法が多岐にわたる場合があることが挙げられる。分類・整理を試みる場合、その第一歩として、多岐にわたる意味・用法を丹念に記述していき、その過程の中でできうる限りの一般化を試みる必要がある。本稿では副詞「どうせ」が用いられている文を3つの構文パターンに分類し、そのそれぞれの意味・用法に関する特徴を記述していく。これは、副詞「どうせ」の分類上の位置付けを考えるための足がかりとするためである。

2. 副詞「どうせ」を用いた文の構文パターン

本稿の執筆にあたり、副詞「どうせ」を含む用例を983例採集した⁽²⁾。これらは数量的な観点からおおむね3つの構文パターンにまとめることができる⁽³⁾。1つ目は副詞「どうせ」が主文で用いられているもの（どうせP。）で、594例（約60%）採集した。

(1) どうせあたしは馬鹿よ、兄ちゃんなんかには訊かないわ、ねえ汐見さん？
(福永武彦『草の花』)

(2) どうせ桑田伸子の社長など長くは続かない。
(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

(3) どうせ人は、生まれてくれば死ぬのです。

(ルイジ・ピランデルロ作 能美武功訳『ヘンリー四世』)

2つ目はナラ条件節内で用いられているもの(どうせPなら、Q。)で、94例(約9%)採集した。

(4) どうせ休むなら早い方がいいね。早く養生して早く好くなって、そうしてせつせと働らなくなっちゃ駄目だ。(夏目漱石『明暗』)

(5) どうせ滅びるのなら、こういう愚かしい男もいたのだということを書き遺しておきたい。(太宰治『人間失格』)

(6) 向こうからそういう態度に出られると何だか振られたような気がし、どうせ別れるならこっちから引導をわたすべきだった、と口惜しい思いに陥った。(佐野良二『五味氏の宝物』)

3つ目は原因・理由のカラ節内で用いられているもの(どうせPから、Q。)で、258例(約26%)採集した。

(7) むろん、芸者たちはいやな顔をする。が、どうせ金を使って散財しても、もてないことを知っているから、苦にはならない。

(織田作之助『土曜夫人』)

(8) どうせ隣の原っぱから逃げられるから、病院に火がつくまでは大丈夫だ、と周二は判断した。(北杜夫『楡家の人びと』)

(9) あの話が正確じゃないなんて、気にすることは全くありません。ウリスがどうせ適当に話は膨らませてくれるでしょうからね。

(ノエル・カワード作 能美武功訳『平等、平等、平等』)

以降、それぞれの構文パターンごとに副詞「どうせ」が用いられている文の特徴について記述していく。

3. 副詞「どうせ」が用いられている文の特徴

3.1 どうせP。

この節では副詞「どうせ」が主文で用いられている場合の特徴を記述していく。

第1の特徴は「評価性に関する特徴」である。この特徴は話し手が副詞

「どうせ」に後続するPをどのように評価しているか、すなわち、Pを望ましい事柄として捉えているのか望ましくない事柄として捉えているのかに関する特徴である。

用例を観察していると、「どうせP。」のPには社会通念上望ましくないと思われる事柄が置かれているケースが目につく。

- (10) どうせ私は莫迦ですよ。慎ちゃんのような利口じゃありません。私のお母さんは莫迦だったんですから、——
(芥川龍之介『お律と子等と』)
- (11) だって、歌舞伎の人なんて、どうせ、頭でっかちの六頭身だろ
(曾野綾子『太郎物語』)
- (12) このような古風な顔では、どうせ女には好かれまいが、けれども世の中には物好きが居らぬものでもあるまい。(太宰治『ロマネスク』)

(10)から(12)のPの命題内容は、「私が莫迦である」こと、「頭でっかちの六頭身(である)」こと、「女に好かれない」ことであり、これらは社会通念上望ましくないと考えられる事柄である。

- (13) 「どうせあなたは偉いのよ」みち子は怒って立上った。
(岡本かの子『老妓抄』)
- (14) ええ、どうせ、あなたがたはごりっばなお生まれですやろ。
(田辺聖子『新源氏物語』)

(13)(14)のPの命題内容は「あなたが偉いコト」「あなたがりっばなコト」である。これらは(10)から(12)とは異なり社会通念上望ましいと考えられる事柄であるが、(13)における発話後の話し手(みち子)の行動、(14)における過剰な敬語の使用から、話し手はこれらの命題内容を発話時において望ましくない事柄として捉えていると考えられる。以上のことから、「どうせP。」という構文パターンのPに位置付けられる命題内容を話し手は望ましくない事柄として捉えていることがわかる。この点を次の(15)(16)の比較を通じて確認しよう。

- (15) 私はフリーターです。

(16) どうせ私はフリーターです。

(15)(16)の命題内容は「私がフリーターである」ことで共通である。この命題内容は評価性が定まっていない。すなわち、この命題内容に対してなんら評価を下さずに発話している可能性と評価を下して発話している可能性が考えられ、評価を下している場合には、命題内容を望ましい事柄として捉えている可能性と望ましくない事柄として捉えている可能性が考えられる。話し手が命題内容に対して評価を下している場合には、そのことを明示的に示すために評価の副詞を使用することが可能であるが、次の(17)(18)で示すように(15)には命題内容が話し手にとって望ましい事柄であることを示す「幸い」、望ましくない事柄であることを示す「残念ながら」のいずれもが共起可能である。

(17) 幸い、私はフリーターです。

(18) 残念ながら、私はフリーターです。

このことは、(15)の命題内容の評価性が定まっていないことの示している。一方、(16)には、次の(19)(20)で示すように「残念ながら」は共起可能であるが「幸い」は共起できない。

(19) *幸い、どうせ私はフリーターです。

(20) 残念ながら、どうせ私はフリーターです。

このことは、評価性が定まっていない命題であっても、「どうせP。」という構文パターンのPに置かれることによって、その命題が話し手にとって望ましくない事柄であることを示したことになる、ということの意味している。

第2の特徴は「判断の前提に関する特徴」である。この特徴は、「どうせP。」という構文パターンを用いる場合に、話し手はPにおける判断の根拠となる知識や情報を発話時以前から持ち合わせていなければならない、更には言えば、発話時以前においてもすでに持っている知識や情報を根拠に発話時と同じ判断を下せなければならないという特徴である。この点を次の(21)から(23)を見ながら確認しよう。

(21) どうせあの人は遅れてきますよ。

(21)を聞いた者は、話し手が「あの人」のことを発話時以前から知っており、「あの人は遅れてくる」という判断が発話時以前の「あの人」の行動パターンや性格を根拠としたものであると解釈するだろう。もし「あの人」の行動パターンや性格に関する知識や情報を持ち合わせていなければ、話し手は副詞「どうせ」を使用しないはずである。

(22) そんなことをするなんて、あいつは馬鹿だ。

(23) *そんなことをするなんて、どうせあいつは馬鹿だ。

(22)では、話し手は「あいつ」のとった行動を根拠に「あいつは馬鹿だ」という判断を下しているが、この情報は発話時に手に入れたものとして位置付けられている。従って、発話時以前において、話し手は「あいつは馬鹿だ」という判断を下さない可能性がある。この(22)に副詞「どうせ」を共起させた(23)は非文法的な文となる。次の実例(24)(25)では、「どうせP。」におけるPという判断に至るまでの背景説明が書かれており、これらはいずれも発話時以前から話し手が情報や知識として持ち合わせていたものである。また、(26)のPの命題内容は時間を超えて成立する事柄であり、発話時以前においても同様の判断を話し手が下すことは可能である。

(24) 廉直などと云う形容詞で書かれる男は大抵堅すぎて女にすかれぬ。武士であつて後に講釈師にでも成ろうという心掛の男、こんなのは浮気な女に時々すかれる。そこで、軍右衛門の女房は浮気者であつたらしく、別腹の第九郎右衛門といい仲に成つてしまった。寛延二年の暮の話である。翌年の三月、とっくから人の口にはのぼつて独り「廉直なる」軍右衛門のみが知らなかつたものが、薄々気づき出したようだから、二人はいくらかの金をもつて逃出してしまった。どうせこういう二人が、少々位の金で暮らして行けよう訳が無い。

(直木三十五『相馬の仇討』)

(25) じゃ、仕事の話をしようではないか。君は社会部だね。じゃ、僕と同じだ。どうせ、僕が当分君の仕事を見てあげることになるんだろが、——なんといつても僕は社会部では古参だからね。部長より

- も古い。 (織田作之助『青春の逆説』)
(26) どうせすべては過ぎ去るのだ。 (有島武郎『或る女』)

第3の特徴は「事柄の成立の可能性に関する特徴」である。これは、Pで述べられている事柄の成立の可能性を話し手がどのように捉えているのかに関する特徴である。

用例を観察していると、文末が「～に違いない」「～に決っている」といった形式になっているものが目に付く。

- (27) お前には、畑やお金などをいくら分けてやったところで、どうせ直ぐに他人の手に渡してしまうに違いない。
(渡辺温『イワンとイワンの兄』)
(28) どうせ帰って来ないにきまっている。 (太宰治『走れメロス』)

これらの文末形式は、事柄の成立の可能性が極めて高い、更に言えばそれ以外の可能性はないという話し手の認識を表すものである。事柄の成立の可能性に対する話し手の認識を表す形式としては他に「～かもしれない」がある。この形式は、事柄の成立の可能性についての話し手の認識を表している点では「～に違いない」「～にきまっている」と共通しているが、事柄の成立の可能性があると話し手の認識を表すと同時に事柄が成立しないの可能性もあると話し手の認識を表している。従って、(29)で示すように、お互いに矛盾する2つの事柄を「～かもしれない」を用いて並列させることが可能である。

- (29) 彼は帰って来るかもしれないし、帰って来ないかもしれない。

この(29)に副詞「どうせ」を共起させると、(30)に示すように非文法的な文になる。

- (30) *どうせ彼は帰って来るかもしれないし、帰って来ないかもしれない。
い。

このことから、「どうせP。」という構文パターンにおいて、話し手はPの成

立の可能性が極めて高いという認識を示していることがわかる。また、次の(31)(32)の比較から、Pの成立の可能性の高さは、特定の条件下に限定されるものではないことがわかる。

- (31) この問題ができなかったら、不合格になるに違いない。
(32) ??この問題ができなかったら、どうせ不合格になるに違いない。

(31)では、「不合格になる」可能性が極めて高いのは「この問題ができない」という条件下においてのものである。この(31)の主節に副詞「どうせ」を共起させた(32)はすわりが悪い。一方で、(32)の従属節を「～ても」に変えた次の(33)は文法的な文である。

- (33) この問題ができなくても、どうせ不合格になるに違いない。

(33)では、Pの成立の可能性は条件の如何を問わず極めて高いことになる。次の(34)(35)は「どうせP」の従属節として「～ても」節が用いられている用例である。

- (34) 上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。
(芥川龍之介『羅生門』)
(35) 父の任地が転々と二、三年ごとに替るので、台北の学校へ転校しても、どうせまた二、三年でどこかへ替らなければならず、なるべくならこのまま内地の中学校に置いておいた方が、本人のためにいいという両親の考えから出たことであった。(井上靖『あすなろ物語』)

以上のことから、「どうせP。」において、話し手はPの成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いとの認識を示していることがわかる。更に、このような見方をすることによって、次の(36)から(37)の非文法性に説明を与えることが可能となる。

- (36) *どうせ私は死にたい。
(37) *どうせ私は不合格になった。

(36)は話し手自身の希望を述べているが、話し手の心理状態は話し手自身の中で既に確定しており、その可能性について改めて言及する必要はない。(37)は過去の事実を表しているが、過去の事実は既に事実として確定しており、その可能性について言及するまでもない。ただし、過去の事柄であっても、それが事実として確定していない場合には、次の(38)の実例のように、「どうせP。」を用いて、その可能性について言及することは可能である。

(38) どうせこの辺のホテルへしけこむつもりだったんだらうが。

(筒井康隆『エディプスの恋人』)

また、次の(39)のPは過去の事実を表しており、事実として既に確定しているが文法的な文である。

(39) どうせ私は不合格になりましたよ。

この文では、話し手は、聞き手にも既に認識されており本来的に言及する必要のない過去の事実Pの成立の可能性にあえて言及し、その成立の可能性が極めて高いことを示すことによって、P以外の成立の可能性を改めて否定し、再確認しているものと思われる。(39)からはその含意として話し手の投げやりな気持ちを読み取ることができるが、これは、既に確定している話し手にとって望ましくない事柄について再度言及しなければならないことに対する話し手の心的態度のあらわれであると考えられる。

これまでの議論を通じて指摘した副詞「どうせ」が主文で用いられている場合の特徴を改めて列挙しておく。

● 評価性に関する特徴

話し手はPを望ましくない事柄として捉えている。

● 判断の前提に関する特徴

話し手はPにおける判断の根拠となる知識や情報を発話時以前から持ち合わせていなければならない。

● 事柄の成立の可能性に関する特徴

話し手はPの成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いとの認識を示している。

3.2 どうせPなら、Q。

副詞「どうせ」がナラ条件節で用いられている場合の特徴を記述する前に、ナラ条件節以外の条件節(レバ節、タラ節)内での副詞「どうせ」の使用の可否について述べておく。条件節中で副詞「どうせ」が使用されている用例を100例採集したが、94例がナラ節で、レバ節は5例、タラ節は1例であった。しかも、次の(40)から(42)で示すように、副詞「どうせ」がレバ節、タラ節で使用されている場合は、「～のであれば」「～とすれば」「～のだったら」といったナラ節と同じような性質を持つ形式になっている⁽⁴⁾。

- (40) それまで、どうせ助からないのであれば実験のためにも医者ならば切るべきだと密かに主張していた中川脩亭も、口を噤んでしまった。
(有吉佐和子『華岡青洲の妻』)
- (41) どうせ逃れられない運命とすれば、おぶさつて来るものをいくらでも引受けよう。
(武田麟太郎『大凶の籤』)
- (42) どうせ働くんだったら、暗い危険な環境よりも、明るい安全な環境の方がいいだろうじゃないか。
(三浦哲郎『忍ぶ川』)

また、次の(43)(44)で示すように、副詞「どうせ」はレバ節、タラ節内におさまらない。

- (43) [どうせ[雨が降れば、中止になる]].
- (44) [どうせ[これが出来なかったら、不合格になる]].

これらのことから、条件節内での副詞「どうせ」の使用はナラ節に限られ、レバ節、タラ節では不可能であるといえることができる。この現象は、3.1で述べた「事柄の成立の可能性に関する特徴」によって説明することができる。つまり、ナラ条件節は話し手が条件節内の事柄を仮に真であると仮定していることをあらわすが⁽⁵⁾、副詞「どうせ」の使用における事柄の成立の可能性がいかなる条件下でも極めて高いという認識は、その事柄が真であるという認識へとつながるのである。

さて、副詞「どうせ」がナラ条件節内で用いられている場合の特徴を記述していく。

まず第1の特徴は「主節の表現類型に関する特徴」である。これはナラ条

件節に対する主節の特徴とも重なるが、「どうせPなら、Q。」という構文パターンにおいて、Qには話し手の態度や判断を表す文がくるという特徴である。次の(45)から(48)はQがそれぞれ「意思」「希望」「提案」といった態度及び「評価付け」という判断の表明になっている。

- (45) どうせ盗むなら、人間の一番大切なものを盗んでやろうと思ったんです。
(井上ひさし『ブンとフン』)
- (46) どうせ死ぬのなら、見なれた太陽の下で死にたい。
(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (47) どうせ北海道で開業するなら札幌でしては如何です。
(渡辺淳一『花埋み』)
- (48) じつは、面白いところを見付けてね、井村を案内しようとおもっているのだが、どうせ出掛けるなら二人より三人の方がいい。
(『砂の上の植物群』)

ただし、次の(49)(50)及び(51)(52)の比較からわかるように、副詞「どうせ」が使用できないケースもある。

- (49) 田中さんが行くなら、私も行きます。
- (50) * どうせ田中さんが行くなら、私も行きます。
- (51) あなたが来てくれるのなら、鬼に金棒です。
- (52) * どうせあなたが来てくれるのなら、鬼に金棒です。

ここで(50)(52)の非文法性を説明し、そのことを通じて第2の特徴を提示するために、「どうせPなら、Q。」という構文パターンにおけるPとQの意味的な関係について考える。(45)から(48)を観察すると、まず、PがQを内包する事柄であることを指摘することができる。例えば、(45)では「人間の一番大切なものを盗む」ことは「盗む」の一部であり、(46)は「見なれた太陽の下で死ぬ」ことは「死ぬ」ことの一部である。しかもQではPをより価値あるものにするための方略が述べられているように思われる。つまり、3.1で述べた「評価性に関する特徴」をふまえると、話し手は(少なくともQなしでは)評価に値しない事柄であると捉えているPの成立の可能性がいかなる条件下でも極めて高いと認識し、それが真であると仮定した場合の、Pの

評価を上げるための方略をQで述べているということである。例えば(47)では、「(札幌以外の)北海道で開業する」ことは評価に値しないが、「札幌で(開業)する」ことによって「北海道で開業する」ことに価値が加えられる、(48)では「出掛ける」ことは評価に値しないが、「三人で出掛ける」ことによって「出掛ける」ことに価値が加えられると解釈することが可能である。ところが、(50)(52)のPとQはこのような意味的な関係になっていない。例えば(50)では、「田中さんが行く」ことは「私が行く」ことを内包していないし、(52)では、「鬼に金棒である」ことは「あなたが来る」ことの価値を上げるための方略ではない。このような理由から(50)(52)が非文法的な文になっていると考える。そこで、副詞「どうせ」がナラ条件節内で用いられている場合の第2の特徴として、ナラ条件節は主節を意味的に内包する事柄を表しており、主節はナラ条件節に付加価値を与える事柄であるという「主節とナラ条件節との意味的な関係に関する特徴」を挙げておく。

これまでの議論を通じて指摘した副詞「どうせ」がナラ条件節内で用いられている場合の特徴を改めて列挙しておく。

- 主節の表現類型に関する特徴

主節には話し手の態度や判断を表す文がくる。

- 主節とナラ条件節の意味的な関係に関する特徴

ナラ条件節は主節を意味的に内包する事柄を表しており、主節はナラ条件節に付加価値を与える事柄である。

3.3 どうせPから、Q。

この節では、副詞「どうせ」が原因・理由のカラ節内で用いられている場合の特徴を記述していく。

3.1では、「どうせP。」という構文パターンにおける特徴として「評価性に関する特徴」を挙げた。また3.2で「どうせPなら、Q。」という構文パターンにおける「主節とナラ条件節の意味的な関係に関する特徴」を挙げる際に「評価性に関する特徴」をふまえた議論を行った。つまり、いずれの場合も、話し手はPを望ましくない事柄、評価に値しない事柄であると認識していると考えられるわけである。しかし、「どうせPから、Q。」という構文パターンにおいては、次の(53)から(55)で示すようにPが話し手にとって望ましくない事柄、評価に値しない事柄ではない場合がある。

- (53) なんでも戦時中、成金さんにうけだされて出世したといううわさもありましたけど、どうせ軍需会社でしょうから、いまはどうなりましたか……。 (壺井栄『二十四の瞳』)
- (54) 松島さん、あんたの家は工場へ行く途中じゃったね。どうせ通りがかりじゃから、さあここへ乗っていきなさい。 (佐左木俊郎『獵奇の街』)
- (55) スパーリング、いいですよ。俺はかまわない、やりましょう。どうせこっちだって、スパーリング・パートナーは必要なんだから、それで金がもらえるならかえってありがたいくらいですよ。 (沢木耕太郎『一瞬の夏』)

本稿ではこの点に関する踏み込んだ議論を行う用意がないので、「評価性に関する特徴」が「どうせPから、Q。」という構文パターンにおいてはキャンセルされるという事実のみを指摘するにとどめる。

さて、「どうせPから、Q。」という構文パターンにおいてもPとQの意味的な関係に特徴が見られる。まず、次の(56)から(58)を見てみよう。

- (56) どうせ儲かってないんだから、ジャズ喫茶店主は威張っていい。 (松平維秋『松平維秋の仕事』)
- (57) 「ああ、いいとも。何でも言うておくれ。どうせ私は、あれの事には、呆れはてているのだから。」 (太宰治『酒の追憶』)
- (58) 「この度は無理なお願いをして、恐縮致しております」「いえいえ、どうせ部屋が空いているのですから一向に構わないのですよ」 (渡辺淳一『花埋み』)

(56)から(58)では、話し手はQを社会規範、その場の状況及び話し手の意思や意向にそぐわないと認識しつつ容認しており、その根拠がPで提示されている。例えば(56)で「店主が威張っている」ことは社会規範にそぐわないものであるが、話し手は「儲かっていない」ことを根拠にそれを容認しており、(57)では「(好きなことを)何でもいう」ことは話し手の意向にそぐわないことであるが、「あれの事に呆れはてている」ことを根拠にそれを容認している。これらのPとQの意味的な関係には、3.1で挙げた「事柄の成立の可能性に関する特徴」がかかわっているようである。つまり、Pの成立の可能性がいか

副詞「どうせ」についての覚え書き

なる条件下においても極めて高いことを根拠に、通常では容認できないQを容認しているのである。この点を確認するために、次の(59)から(60)を見てみよう。

- (59) *どうせ間に合わないから、急ぐことにした。
(60) 間に合わないから、急ぐことにした。
(61) どうせ間に合わないから、ゆっくり行くことにした。
(62) ?? 間に合わないから、ゆっくり行くことにした。

(59)の非文法性は、副詞「どうせ」の使用によって成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いとの認識が示されているPに対して、その成立の可能性を低める可能性を持つ事柄がQで提示されていることに起因していると考えられる。つまり「急ぐ」ことによって「間に合わない」可能性が低くなるのである。このような場合でも(60)が示すように副詞「どうせ」を使用しなければ文法的な文となる。また(62)のすわりの悪さは「間に合わない」という状況において「ゆっくり行く」という対応を取ることが通常では容認できないことに起因していると考えられるが、(61)が示すように副詞「どうせ」を使用しPの成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いとの認識を示すことで、文法的な文となる。

続いて次の(63)から(65)を見てみよう。

- (63) どうせまた徹夜になるのでしょうかから、いまのうちに私たちだけ大きいそぎで、ちょっと腹ごしらえをして置きましょう。
(太宰治『饗応夫人』)
(64) どうせ私は、おいしい御馳走なんて作れないのだから、せめて、ていさいだけでも美しくして、お客様を眩惑させて、ごまかしてしまうのだ。
(太宰治『女生徒』)
(65) どうせいつでもいるんだから一まとめにしてあらかじめ用意しておき、みんなで共通に使うようにしたらどうだろう。
(富田倫生『青空のリスタート』)

(63)から(65)はPの成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いとの認識を副詞「どうせ」の使用によって示した上で、(言語表現化はされて

ないが)それによって必然的に生じることが予想される事柄に対する最善の方策がQで提示されている例である。例えば(63)では「徹夜になる」可能性が極めて高く、その結果「夜中に空腹に襲われる」というような予想され、それに対する最善の方策として「大急ぎで腹ごしらえをしておく」ことがQで提示されており、(64)では「おいしい御馳走がつかれない」可能性が極めて高く、その結果「自分が恥ずかしい思いをする」というような事柄が予想され、それに対する最善の方策として「ていさいだけでも美しくして、お客様を眩惑させて、ごまかしてしまう」ことがQで提示されていると考えられる。

更に次の(66)から(68)を見てみよう。

(66) どうせ親父は年い老ってるから先へおっ死んでしまう

(三遊亭圓朝『菊模様皿山奇談』)

(67) どうせ芸妓屋の娘分になるくらいだから、生みの親は身分のあるものでないにきまっている。

(夏目漱石『行人』)

(68) どうせ貴方に上げたんだから、どう使ったって、誰も何とも云う訳はないでしょう

(夏目漱石『それから』)

(66)から(68)ではPの成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いとの認識を副詞「どうせ」の使用によって示した上で、それによって必然的に生じることが予想される事柄がQで提示されている例である。例えば(68)では「父親が年をとっている」ことによって必然的に予想される「(父親が)先におっ死んでしまう」ことが、(67)では「芸妓屋の娘分になる」ことから必然的に予想される「生みの親が身分のあるものでない」ことがそれぞれQで提示されている。QはPから必然的に予想される事柄であるから、Pの成立の可能性が極めて高ければ、Qの成立の可能性も極めて高くなる。その結果、(66)から(68)では副詞「どうせ」がカラ節内におさまっているのかおさまっていないのか判然としなくなっている。

さて、ここで(56)から(58)、(63)から(65)及び(66)から(68)のそれぞれのPとQの意味的な関係のつながりを考えてみよう。(66)から(68)では成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いと話し手が認識しているPから必然的に導き出される事柄がQで提示されている。Qで提示される事柄が社会通念やその場の状況、話し手の意思や意向にそぐわない場合も考えられる

が、そうであったとしても、QはPから導きだされる必然的な事柄であるから話し手はその事柄の成立、不成立に関与することは出来ない。したがって(56)から(58)のように、Pから必然的に導き出される事柄を容認する姿勢をQで提示するか、(63)から(66)のように最善の方策を新たにQで提示する、といった具合に話し手のとり得る態度も限定されるのである。

これまでの議論から副詞「どうせ」がカラ節内で用いられている場合の特徴として以下の点を指摘しておく。

- 評価性に関する特徴

この特徴はキャンセルされている。

- 主節とカラ節の意味的な関係に関する特徴

カラ節には成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いと話し手が認識している事柄が提示されており、主節にはそのことを根拠として必然的に導き出される事柄、及びそれに対する話し手の容認の態度や最善の方策が提示されている。

4. まとめ

副詞「どうせ」が使用される3つの構文パターンのそれぞれについて、その特徴を記述してきた。それぞれの構文パターンに固有の特徴も認められるが、3つの構文パターンに共通する特徴として「話し手はPを成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いと認識している」という特徴を指摘することができる。「どうせP。」では、Pは話し手にとって望ましくない事柄であり、しかも判断の根拠となる知識や情報を話し手は発話時以前から持ち合わせている。この構文パターンの文が含意する話し手の投げやりな気持ちは、望ましくない事柄の成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高いこと、さらには事柄の成立、不成立に関与できないことに対する心的態度の表れであると考えられる。「どうせPなら、Q。」では、Pは話し手が評価に値しないと捉えている事柄である。このようなPの成立の可能性がいかなる条件下においても極めて高く、それが真であると仮定された場合、話し手はPの成立を否定しない範囲でPの価値を高める事柄を考えることができる。Qで示されている事柄がPに内包され、Pに付加価値を与える事柄であるのはこのような事情によると考えられる。「どうせPから、Q。」では、QはPから必然的に導き出される事柄、または及びそれに対する話し手の容認

の態度や最善の方策である。Pの成立の可能性はいかなる条件下においても極めて高いので、話し手はPから必然的に導き出される事柄の成立、不成立に関与できない。したがって話し手がそこでとり得る態度も限定されるのである。

注

- (1)工藤(2000)を参照。
- (2)『CD-ROM版新潮文庫の100冊』『CD-ROM版明治の文豪』及び青空文庫〈<http://www.aozora.gr.jp>〉に登録されている作品から検索ソフト(QGRE P 32)を用いて採集した。
- (3)3つの構文パターンで全体の96%がカバーされる。
- (4)「～のであれば」「～のだったら」に関しては野田(1997)を参照。
- (5)益岡(1993)を参照。

参考文献

- 野田晴美(1997)『「の(だ)」の機能』(くろしお出版)
益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』(くろしお出版)
益岡隆志(1997)『複文』(くろしお出版)
森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』(くろしお出版)
工藤 浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』
(岩波書店)
渡辺 実(2001)『さすが!日本語』(ちくま新書)